

「老人問題の昔話的解決法―「うばすて山」では夢がない―」

近藤良樹

1. はじめに

時間は、むかしにはもどってくれない。どんなに元気な若者もやがておとずれる老化と死をまぬがれることはできない。われわれは「もう一度、過去にかえってみたい」という願望をもつが、時間は、不可逆的にさきへさきへと進むばかりである。

しかし、同類のものごとの繰り返しの可能なばあい、時間の逆転ではないが、「もう一度やりなおしたい」という願いは、時にかなえられることがある。再受験・再就職・再婚等は、失敗した過去を清算し、出直そうという試みである。昔話では、さらに願いを大きくもって、人生全体の若返りを求めることがある。そして、どこの昔話も、そういう願望のかなった話をもつ。日本の昔話の「若返りの水」という話もそういうものの一つである。関敬吾『日本昔話大成』（第7巻 角川書店）の「若返り水」に各地のそれがまとめてあるが、これを見ると、大体、つぎのようである

山にいった爺さまが、いい匂いがするのでそれをたどってみたら、清水が湧いていて、それを飲んだ（あるいは、山で一休みして眠っていたら白い髭の老人が夢に出てきて「若くなりたければ、上の水をのめ」といったので、そのとおりにした）。すると、腰がのび、しわが消えて、若者にと若返った。これを知った婆さまもまねたが、よくばってその水を飲みすぎて、赤ちゃんになってしまい、爺さまは、この子を育てることになった。

というような話であるが、中には、爺婆が逆になっているものもある。

婆さまが洗濯のために川（あるいは井戸）にいった。が、帰ってこず、心配していたら、若い美女が家に入ってくる。なんとそれが婆さまだった。「のどがかわいて水を飲んだら、眠くなり、目が覚めたらこうなっていた」という。爺さまは、自分もと出かけ、大量に飲んだり、あびたりした。かえりが、おそいと見にいくと、爺さまは、赤ちゃんになっていた。

なかには、水ではなく、山で「桃」の果汁を吸うとか、梅干しや味噌をなめながら水をのむというものもある。あるいは、神から、若返りの仙薬とか護符をもらうものもある。

2. 若返りか再生か

赤ちゃんへと極端にではなく、老化現象を停止し、あるいは逆転して、活力あふれる若者にもどるといふ若返りは、人の昔からの変わらぬ願望であろう。「若返りの水」の話でも、「美女」になったとか、「25才の若者」になった等という。現代では身近には若返りの秘薬と称するものがその代わりをつとめている。頭髪の若返りとしての毛はえ薬は、しばしば宣伝され話題にされている。各種の精力絶倫の効能をうたう秘薬も、老人にとっては若返りに連なるものであろう。

秘薬でなくても、状況をうまくお膳立てできるなら、そのような若返りの実感を生じさせることはできる。年とっての同窓会は、そのひとつである。みんなで共同の少年時代・青年時代へともどって、そのひととき、集団的に、若返るのである。卒業後の長いあいだのブランクは、その間の共同の記憶をつくることなく、あたかも、昨日が卒業式であったかのように、今日につづけていくのである。共同的に想起される内容は、みんな若々しいままであり、その若い日のままに、いい年寄りが「太郎ちゃん」「花子ちゃん」と呼びあつて、こどものようになって、しわだらけの顔の背後の若い日の面影に胸をおどらせたりするのである。幸いなことに、われわれは、感覚像を前にしながらもこれに信をおかず、美化された記憶の図式を描きだして、この想起した図を楽しめるのである。

同窓会にでかけたときは、みんな張り切って、若いつもりで無理をするので、そのあと、ひとりになって、どっと疲れをだし、昨日は「太郎ちゃん」だったのに、今日は「じい」と呼ばれて老化している現実の自分を思い出し、玉手箱をあけた「浦島太郎」のような気分になることがあるようである。しかし、それだけ確かに、その時は、つかのまのことであつても、若返っていたのである。

もっとしっかりと若返る方法としては、若々しい鏡を見つけるやり方がある。若いものを相手にすることで、それに見合う形に若返るのである。最近の若者は、電車等にのつても、老人を老人としては扱わないから、老人は、目の前に座っている若者のまえで堂々と背筋をのばして、若返っておれる。老ゲーテは、孫のような若い乙女と恋をしたというが、そのとき彼は、若者に近い心性にと若返っていたはずである。同窓会とちがって、現実の若い者を前にして、(眼が外を向き、自身を見ないことを幸いにして) 同じように若くなりえていたといつてよいのではないか。こういうのは「身のほど知らず」で今日では破廉恥な事柄に属すが、まじめな社会的な活動に専念して「第一線にたつて」「若者にまじつて」ということであつても、当然若々しくなれるはずであろう。

「若返りの水」では、一方の老人は、赤ちゃんにまで戻ってしまったが、これは、現実に

は、老人の痴呆症などで見られる。高級な精神的な機能が欠けてきて、幼児化していくのである。しかし、こんな悲惨な幼児化は求められはしない。欠損・低級化としてのものではなく、求められるのは、もう一度はじめからやり直す、生まれかわるというような若返りである。昔話のなかでは、すこし若返るというよりは、この若返りの極致としての生まれ変わるものの方がよく見られる。

人生の節目でとりおこなわれる通過儀礼においては、その時に死んで、きれいさっぱりとそれまでの過去と別れをつけ、別の存在としてもう一度生まれかわるというかたちをしばしばとる。それほど大した節目ではなくても、死んで生まれ変わるというかたち、「死して成れ Stirb und Werde」は、区切りをつけるには、単純明快であって、よくとられる形式である。わが国の神社には、「茅の輪」というものがある。茅でつくった大きな輪のなかをくぐることで生まれかわるのである。それは、母から生まれ出ることを象徴しているものようである。すこし若返ってなどとけちなことはいわないで、おもいきって、ゼロにかえり、赤ちゃんから出なおす、再生するということである。

かつては、少年少女が成人するときには、やはり、一度、そこで死んで生まれ変わるというかたちをとるのが一般的だったようである。大人として生まれ変わる、大人の赤ちゃんになるということであろう。「若返りの水」の話では、赤ちゃんになってしまうのは、こっけいで困ったこととなっているが、むしろ、その方が、現実の通過儀礼のなかでは、普通だったといつてよい。

3. 生まれ変わりの方法

ところで、生まれ変わり若返らせる話としては、グリムでは、かじ屋さんがするように、聖ペテロが老人を元気な若者に焼きなおす話があり¹⁾、死んだものを再生させるものとしては、おなじ聖ペテロが死んだものの骨肉をばらして、煮てきれいにし組みたてなおして再生させるという話等がある²⁾。先のが「水」をのんで直ちにと安易なの比して、手のこんだものとなっているが、若返りや再生は、手がこんでいたり、命がけのものになってもいたようである。

それは、過激で乱暴なものになることもあった。再生の儀式において、死ぬほどなぐったり失神させる等のこともやったようである。成人するとき、ところによっては生殖器を傷つけるなどのことをしたようで、それがもとで実際に死にいたることもあったというし、なぐったりして失神させるのみか、殺してしまうようなこともあったという。

井本英一『習俗の始原をたずねて』によると、「なぐる」ことは、生を鼓舞することであり、あるいは、失神させたり、ときに真に死んでしまったとしても、それでこの世なりあの世にと再生する活力があたえられたのだと捉えられたようである³⁾。アイヌの習俗に、夫の死にのぞんで、その妻が失神するまでひどくなぐられたり、踏みつけられることがあったというが、井本は、それを、「死者に代わって、再生の打擲を受けるということであろう⁴⁾と解釈している。夫があの世界に再生するには、なぐって活力をつけさせなくてはならないので(死体をまさしく、むちうつところもあったようだが)、夫のかわりになぐられたのだと。

われわれの昔話には「死に鞭・生き鞭」というのがある。竜宮でのみやげものなどとしてあるのだが、そのむちで打つと死んだり、死んだものが生きかえったりする便利なものである。現実のうちでも、かつては、そういうように、むちうち、なぐって活力をえさせていた。ついさきほどの戦争でも、わが国の軍隊では苛酷な「愛のびんた」が盛んであったというし、いまでもけっこう中高生ぐらいのこどもは、「愛のむち」で愛されているようで、ながい伝統があるものと感じられる。そういえば、ヨーロッパのばあいも、さかのぼるほどに、こどもの前に立つ先生の必携品として想起されるのは、「むち」になるのではないか。

坐禅するとき、ねむけがさすと、警策で打ってもらう。それでしゃきっとして活力がよみがえるのである。素人がつどうときのそれは軽いものだが、昔は、若い出家僧たちのあいだでやりあうときは、思いきり打ちすえて棒が折れるぐらいであったとかいう。ボクシングなどを見るときは、なぐられるのは自分ではないけれども、あれを見ながら眠くなることはあまりないのではないか。おもしろくない眠気をさそうプロ野球でも、乱闘場面になったら、みんな目をさましてこれに見入る。

お伽草子の『一寸法師』では、なぐって過激に元気づけるような道具である「打出の小槌・つえ・しもつ(=むち)⁵⁾を鬼たちが所持していたと記す。武器であれば、「刀」や「弓」を鬼ももっていたらろうし、それらの方が強力で高価なものであろうに、それらをあげず、なぜか「うつ」道具だけをあげている。活力をえるとは、身近には、意識が刺激をうけしっかり覚醒することだとすると、「こころをうつ」のみでなく、「心をぐさっと刺す」というように、「切る」「刺す」等、刀剣などもあげられてよさそうなのなのである。人類の原始的体験、個人のばあいでいえば幼児的体験からいうと、強力な外的刺激が与えられるのは、何とんでも「殴られる」「ぶたれる」ということになり、「刺される」「切られる」は、あまり一般的体験ではないということなのであろうか。いずれにせよ、一寸法師は、お姫さ

まから、その「打つ」道具「つち」で殴打してもらうことで「せい」を打ち出しえているのである。

打出の小槌などで打たれると聞いても、われわれは、ほんの形ばかりのものを想像しがちだが、もともとは、そんな生やさしいものではなかったのではないか。羽でさわるのではなく、むちでしばき、つちで打つのであれば、かなりの暴行を考えるべきなのであろう。かつてはどこの国でも「むちうちの刑」があった。立派な刑であり、そんなこどもだましのもではなかった。とすれば、一寸法師のばあいにしても、せい（＝精、背、生、性）を打ち出しってもらうのであれば、それ相当に覚悟のいる命がけのものになってもよさそうである。

4. 共同体の再生と永生

個人としての死はさげがたいが、種族としては、われわれは、この世での永生を望みうる。子々孫々において、生は刷新されて、活力をとりもどして、生き続ける。だれもが永遠の生命の担い手として生きているのである。各人の生命は、原始の生命の誕生の日から何億年と生き続けてきたのである。かりに、その途中で一度でも生命が途切れたとしたら、そこでその後の生命は断絶して不可能となる。現在のこの私が存在しているということは、その間、何億年と生命の火はこの私まで消えることがなかったということである。

ただし、個人の死はさげがたい。個の死をとおして、生を交替しつつ、全体的に生の再生・永生は可能になっているのである。人間の生の展開は、共同体においてなされるが、この共同体そのものは、個人の生にささえられて、そうとうに長い、個人からみると永遠にも思える生を保つことになっている。神的靈的なものが、世代を通して生きつづけ、共同体そのものは、それによって生きているかのようなものである。

古代のひとびとは、そういう靈的なものが個人や共同体をささえていると考えていたが、人類学などの知見によると、共同体のそれは、その一族の長となる酋長・王さまのなかに生きていると考えられたもののようなものである。自分たちの共同体の存続は、王さまのうちなる神的靈によって可能となっているのであり、王が弱ってくることは、その靈が弱って、共同体の活力が失われていくことに等しかった。ということで、共同体の活力を維持するには、王の活力を維持していくことが求められた。王が老衰して自然死することは、共同体の自然死でもあり、それは、さけられなくてはならないものだった。つまり、王は、活力をもっている時点で、その神的靈をつぎへとうまく渡していくことが求められた。

その確かな方法は、フレーザー『金枝篇』によると、「王を殺す」ことであったという6)。活力のある王が殺されることで、その生き生きとした死をもって、神的靈は、活力をもったままで、つぎの王へと移り行くことが可能になると考えられたのである。ギリシア神話では、神々の王たるクロノスは、つぎの世代をになうはずの若い息子ゼウスによって殺される。オイディプスも、自分の父であるテーバイの王ライオスを打ち殺す。それは、偶然だったのではなく、王が自然死して共同体を衰弱させることをふせぐために、老衰するまえの王を殺して、その神的靈を活力あるままで若い王にバトンタッチさせるというようなことを背景にして語られていたものようである。

フレーザーによると、ところによって、王は、12年とか8年（古代ギリシアは8年）の期限を切って玉座につくことになっていたというが7)、それは、古くは、王の死刑執行の猶予期間を意味するものだったのである。活力を維持したままで王でおれるのは、それぐらいということだったのであろう。しかし、王も自分のいのちがおいしいから、次第に、代わりの者に死んでもらうということになったりもしたようである。奴隷とか、犯罪者などを一二週間王にして、その間は、王妃と同衾することも許して、真に王そのものになりきらせ、そのあと、殺したのだという。その代理には、王の息子が選ばれることもあったようで、ゼウスやオイディプスは、自己防衛のためにも父王を殺さねばならなかったということになる。

このようなかたちでの死と再生は、王のみのことではなく、それは、活力をそのまま維持していこうとする一般の人々においても言えた。若く活力のあるままで死ぬことで、来世でも活力ある存在として再生できるということである。フレーザーによると、ところによっては、老化したりして弱ってくるまえに、来世でその靈が新鮮で活力あるところからスタートできるようにと、自殺したり、殺してもらっていたのだという8)。

こういうところでの究極の老人福祉は、「おばすてやま」どころか老人殺害という極端なものとなっていたのである。昨今は、自然死がいちばんいい死に方だと思われているが、活力ある再生を願うひとびとにとっては、「自然死は、最大の不幸」9)と感じられていたわけである。老化してその靈が衰弱してしまっていたのでは、死んでも、来世での活力は望みえないということになるからである。

来世にいったひとがどうなっているかは、夢においてかれらが時々帰ってくることで推測されたであろうが、若々しいままで死んだものは、いつまでも、夢には若々しくあらわれて、来世で活力をもって生きていると知られる。だが、老衰して自然死したものは、来世

からその老いぼれた姿のまま夢に帰ってくるのである。夢は、自由な想像とちがって、自分でかってに描くことができるものではないから、個人的な作りものではないと考えられていたであろう。想像とちがって、感覚的な確かさをもってあらわれてくるから、もうひとつの現実とも感じられたのである。その夢に、活力あるままで死んだものは、そうあらわれ、老衰死した者は、老いの姿のまま出てくるのであれば、来世で活気にあふれた存在として再生するには、活気のあるときに死なねばならないということになっていたの
であろう。

夢を最大の根拠として、死者は、死ぬときのすがたであの世に再生するものと感じられていたの
であろう。古代の墳墓のなかの遺体に、くびがなかったり、槍が突きささっているものがあつたりする。それは、真にそういうことだったとともに、ひよっとすると、本当は病死したのだが、戦士として死に、したがって戦士として再生できるようにとの願いをこめて、埋葬者たちが、そうしたものかもしれない。フレーザーによると、死体に槍をつきさしたりして葬った種族もあるとのことである(10)。

5. 植物の再生

王が死んだとき、その身体は、しかばねとして腐り果てる。ミイラにして保存していても再生することは望めない。つぎの新王において永続する霊が再生していることを望むばかりである。だが、再生の確かに見られることがある。それは、植物においてである。われわれの「花咲か爺」は、枯れ木に花を咲かせた。冬にむかって死んでいった植物は、春になると、よみがえってくる、再生されるのである。死と再生の劇は、植物にその原始的範型があつたのだといえよう。

イエスの刑死と復活は、その死と再生の劇は、植物のそれに重ねられる。復活祭(Easter)は、ふるくは、穀類の春になっての再生をねがう祭りだったといわれる。農耕社会では穀物の再生をいのり、そのかなう季節としての春の再生を求め、弱々しくなった太陽が再び強力に照らすようにと願って、多様なその儀式・祭典を行なった。われわれの年越し・新年の儀式、祭りは、太陽や各生の、総じて「年」そのものの再生を願うことなのである
う。

不死鳥フェニックスは、500年毎に我が身を焼き尽くして、その灰のなかからよみがえってくるといわれる。焼畑農業などで山野が焼かれた場合、草木は炎と燃え上がり、一面死んだ灰の状態になるが、やがて、そのなかから春とともに、芽生え、生命が復活する。

われわれの「花咲か爺」が花をさかせるのは、「灰」をまくことによってであった。灰＝死が、一定の手続きをもって再生可能になるということである。この再生する植物の生態に、かつての人々は、生命一般の再生と不死のあり方の範型を見いだしていたのであろう。

さらには、この植物の再生・生産に力をそえるものとして、動物的異性生殖が、女性による生（こども）の生産のちからが求められてもいた。農耕の呪術として、男女の生殖行為を演じたり、男根、女陰をかたどったものを祭ったのは、生殖に生産の源を見いだしてのことであった。そこには犠牲も求められ、少女殺しが行なわれることもあったようである。われわれの古代の神話（『古事記』）によると、「おおげつ姫」は、殺され、その身体の各部分から穀類等が生じてくることになっているが、世界の各地にそういう殺人の話が残されている。植物に再生の活力を十分にあたえるべく、生産にちからをもつ女性が犠牲にささげられたのであろう。

生の生産力は女性にあり、そのもつ「血」に、特別の霊的な力があるものと考えられたようである。血に対する恐怖は、血への魔術的力を想定させることになり、生の生産にかかわる女性の、その「血」のとくに顕著にみられる「月経」と「出産」時は、畏怖されるものとなっていた。その魔力のこもる女性の血を、大地にながし、植物に付与して、穀物などの豊かな再生・復活をねがったのである。

それは、さらには、冬至をむかえて弱りきった太陽の復活にも、使用されることがあった。アメリカ大陸の旧文明のもとでは、生きた乙女の心臓をとりだして、これを太陽にささげる儀式があったという。

わが国でも、うら若い乙女が「人身御供」「人柱」にされる話が多い。「神さまは、エッチだったのだ」と思うのは、下衆のかんぐりで、乙女のもつ特別の生の霊力が求められたのだろうといわれている。あるいは、死んだ乙女が神的存在として再生して、人々を守護してくれることを求めたのである。だとすれば、アメリカなどと同じように、わが国でも本当に殺されていた可能性がある。現代でも宗教行事に「稚児」が、晴れ着で飾った可愛い少女がたてられることがあるが、その晴れ着姿は、あるいは「死に装束」であって、そこには、プリミティブな人々の宗教的な犠牲になり、神への捧げものとなった少女たちの悲惨な歴史があったと見てよいのかもしれない。

ところで、確実に植物を再生させるために必要なものは、「血」ではなく、「水」であろう。水が生命を可能とするのである。グリムなどでも「命の水」がいわれ、それを飲めば、王さまの命がたすかる等ということになっているが、植物の生を可能とする水が根底にある

であろうことはいうまでもない。

本稿の冒頭にあげた「若返りの水」は、端的に、水に再生・復活のちからを見いだしているのである。フレーザーによると、穀類の収穫に際して、最後にたばねられた刈り束に穀物霊がついたら、それに、あるいは、その霊が取りついたらとみなされる人に、水をかけるような風習をもつ地方があったという¹¹⁾。かれは、それを「雨乞い」の儀式とみなしているが、根源的には、つぎの春の再生を確かなものにする「命の水」ということだったのであろう。

われわれは、「若水」をいう。若々しい生のこもった若返りの水である。水そのものに再生を可能とする若々しい生のちからがこもっているのだが、新年の儀式として、井戸や泉から湧きだした新しい水を汲んでくるのを「若水」というばあいは、生のこもる水の、その生をいっそうはっきりともっている、若い水を使おうというのでもあろう。

東大寺二月堂の修二会は、上七日の死の儀礼のあと、下七日を再生の儀礼とし、ここで若水を汲む「お水取り」が行なわれる。若水は、命の水ということである。

われわれの昔話にも、生と死をつかさどる水の話がある。石田英一郎『桃太郎の母』の中の沖縄の話としてあげられているものによると、水には、若水である「変若水」（おちみず）と「死水」があって、前者は、へびがとってしまい、したがって脱皮しながら永遠の命をへびは有することになり、人は、死水を浴びて死をさけられない存在になったという¹²⁾。

キリスト教でも、聖なる水をいう。洗礼があり、例の洪水の話がある。M. エリアーデ『聖と俗』によると、ノアの大洪水は、いったん滅亡させて、再生する大がかりな「清め」の儀式になり、洗礼は、古き人が水にひたることで死に（死に水）、そこから（生き水によって）新しい再生した存在を可能にする、水の儀式だったのだという¹³⁾。

6. 輪廻転生・不老不死

現代は、ひとは死ぬとそれで終わりと考えるのがふつうだろうが、古くはどこでも、無に帰すものではなく、べつのもに再生・転生していくものと思われていた。現代ですら一部には、真剣に「来世」や「地獄」を信じているものがある。中世の浄土思想の隆盛をみると、その時代のひとびとは、来世を、極楽や地獄を本気で深刻に信じていたものと思われる。われわれの歴史のなかでは、仏教的にいろどられた輪廻転生が支配的な考えとなっていたのである。

『今昔物語集』などにみると、死んだ母親がとなりの牛に生まれ変わっているのが発見さ

れたり、なまずに転生したじいさまが夢に出てきたりと、身近な動物に再生していたことを記している。もうすこし高級なひとびとは、べつの人間存在にと生まれ変わるものとみられてもいた。わが国の聖徳太子は、中国の仏教の高僧の生まれ変わりで、小野妹子が隋にいったときには、その前世で過ごした寺へ自分のお経をとりに立ち寄せたとか伝えられている(14)。いまでも、ときどき、うまれかわりが巻のうわさにのぼることがある。

ヨーロッパは古代ギリシアでは、ピュタゴラスなど、まだ、自分の友人が犬にうまれかわっているのを直感したりと、動物にも再生していたようだが、だんだんと偉くなってくると動物のような下賤なものに再生するのは許しがたいことに思われたのであろう、プラトンになると、べつの人間にうまれかわることに話題をもっていき、動物との輪廻には消極的になってきている。今日のこされているヨーロッパの昔話をみると、われわれとちがいで、人と動物は厳格に区別され、ふつうには、動物に生まれ変わることはいわれないし(ただし庶民のあいだでは、最近まで、ねずみに生まれ変わるなどのことがいわれていたようである)、動物との結婚もいわれることがない(動物と結婚するかたちのものでも、本当は、魔法で動物にされているのだととらえられる)。

かつては、死は、無化するとかたちでの不安をもたらすものではなく、死んでもつぎの生へと再生復活のなることが信じられていたのであるが、問題は、悩みは、なにに再生するのかということだった。何回かまじめに別の人生に生まれ変わってすごしたものは、永遠のアイデア世界の星の高見にとたかまっていけるのだとプラトンは考えている。それでつらい輪廻とはお別れできると。われわれの仏教世界でも、輪廻転生は、つらく悲しいことの連続であり、はてることのない輪廻から解放されて、永遠の極楽浄土にと飛翔することがひとびとの夢となっていた。そのことは、キリスト教でも同じで、その天国は、やはり、永遠の楽土になる。

これに対して、神仙思想は、そのような転生や来世よりは、至福の現在の永続化を希求した。秦の始皇帝は、徐福に命じてそういう永生のなる仙薬をさがさせようとした。徐福は、わが国にやってきて、それを求めようとしたとかいう。さがしえたのかどうか、かれは、それっきり、皇帝のもとにはかえらなかつた。

古代メソポタミアのギルガメシュ物語によると、ギルガメシュは、ウトナピシュティム老人に「若返りの海草」のあることを教えてもらい、海にもぐってこれを手に入れ、人間へのみやげにしようとしたが、帰る途中へびにこれをとられてしまった。へびは、これを食べることで若返ることができるようになったが、人間には、それはできないこととなった

という15)。そんな昔から、不老不死は、ひとびとの夢だったようである。

『旧約聖書』によると、ひとの祖アダムとイヴは、「エデンの園」にある知恵の木と生命の木のうち、前者しかたべなかつたので、われわれは、知恵はもっても、命については、有限なものにとどまることになっているのだという。

もっとも、昨今のわが国のように長寿社会が現実化してみると、単純に永生を求めるだけではいけないことがわかってくる。老衰しぼけて、介護なくしては生きられないというような長寿は、本人にも周囲のものにも、けっして求められはしない。アダムたちが永遠に生きる生命の木の実をたべてくれていたら、永遠に介護しつづけみんな疲れはてて、アダムを恨むことになっていただろうと思われる。永遠の生命は、老化しないで元気で永遠にということである。かつては、若くして多く夭折していたから、そういうことのないように、元気で長い生をとみんなが望んでいたのであろう。

そのように元気で幸福な生の永遠につづくことならば、万人が望むものであろうが、それは、ひとには許されていないのである。絶対的な権力を手に入れた秦の始皇帝ですらも、永生という願いをかなえることはできなかった。この世界にしながら、ここに、恵まれた永遠を見いだすことは、だれにもできないのであろうか。元気なままの永生は、なりたちえないのであろうか。

永遠とまではいかないが、わが国には、いつまでも若々しく800年も生きた「八百比丘尼」の伝説などがある。「八百比丘尼」や「常陸坊」は、(人魚の肉を食べたりして)何百年も生きたといわれている。だが、これも真実はべつのところにあるようである。柳田国男『山の人生』は、この話を問題にして、そのからくりを、話の語り手が、三百年まえの常陸坊の時代を、まるで見てきたかのように語るのを、彼を常陸坊とみなして、したがって、三百年も生き続けていると錯覚したということなのであろうと推定している16)。「講釈師、見てきたかのような嘘をいい」である。

それは、聞き手がそうであるのみではなく、語り手自体も、自身をそのように錯覚したのであろうと柳田はいう17)。想像力による想像図は、われわれのばあいでは、感覚像とは相当に異なり、あいまいで印象のうすいものしか描かれえないが、かつては、あるいはプリミティブな人々においては、そうではなく、感覚像に匹敵するような直感像を描きだしていたようである。そうであれば、源平の合戦の語り手は、語りながら、想像図をありありと感覚像のように描きだして、自分がその現場に居合わせたように容易に錯覚しえたのである。あるいは、二度目に語る時、はじめに語りつつ描いた直感像をもとに、それを想

起しつつ語るということになれば、あたかも、自分は、現場を見ていて、いまそれを想起しつつ語っているのだと思えたのであろう。

J. ロックは、人格の同一性は、意識の同一性によるという。きょうの意識がきのうのそれと同一になるとき、同一の人格として存続しうるのであり(18)、「実体の同一性」ではなく、「意識の同一性」(19)に人格の同一性があると。たしかに、同じ実体をもつAという自分が、昨日はAとしての意識をもっていたのに、今日は、Bという人の意識になっていたとしたら、自身をBと主張することであろうし、周囲もBという別人になっていると感じることであろう。ときどき、ひとの魂がのり移ったというようなことをいい、「自分は、菅原の道真だ」と本気で信じて、そうふるまうようなひとがいるが、本人としては、真にそのように感じているのであろう。当人のそういう体験に即していえば、ロックのいうことは認められなくてはならない。

常陸坊や八百比丘尼のことを話すその語り手は、語りつつ陶醉し、意識はもはや常陸坊や八百比丘尼そのものになりきり、したがって、そういう人物として自らを感じとることになっていたのであろう。本人がその気であれば、いよいよもって「体験談」は真に迫り、聞き手は、一も二もなく、これを信じ込むことになり、彼らは、何百年も生きているものと解されることになっていったわけである。

さらに、周りから見て、その外見から推して同一とみなされるなら、たとえば、目の前の人物が昨日見たA君とその姿特徴において同一であれば、本当は別人であっても(双子で、今日のA君は、実は弟のB君であっても)同一のA君と見なすことになる。単純には名前が同一であれば、同一と見なされることもありうる。十三代目の酒井田柿右衛門は、「柿右衛門」としては百年も二百年も生きていることになる。かつてはあちこちに常陸坊を自称する者があったという(20)。初代の常陸坊からはじまって自称常陸坊たちへと襲名されて、名前の永続化をもって、常陸坊自身の不老長寿が成立していた可能性もありそうである。

註

1) “Kinder- und Hausmaerchen” von Jacob und Wilhelm Grimm. (KHM147 ‘Das junggegluehte Maennlein’ [若く焼き直された小男])

2) ibid. KHM81 ‘Bruder Lustig’ [陽気な男])

3) 井本英一『習俗の始原をたずねて』 法政大学出版局 1992年 125頁参照

4) 同上書 127頁

- 5) 『御伽草子集』(日本古典文学全集) 小学館 1974年 400頁
- 6) cf. J.G. Frazer ; “The Golden Bough” ed. by R Fraser. 1994. Book 2. Chap. 2. (The Killing of the Divine King)
- 7) cf. ibid. p. 251.
- 8) cf. ibid. p. 229f.
- 9) ibid. p. 231.
- 10) cf. ibid. p. 231.
- 11) cf. ibid. p. 338.
- 12) 石田英一郎『桃太郎の母—比較民族学的論集—』法政大学出版局 昭和31年 9頁
以下参照
- 13) ミルチャ・エリアーデ 『聖と俗』 法政大学出版局 1969年 124頁以下参照
- 14) 『日本往生極楽記』『大日本国法華経験記』等の「聖徳太子」の項参照
- 15) H. ガスター『世界最古の物語』 矢島文夫訳 社会思想社 1973年 61頁参照
- 16) 『定本柳田国男集』第4巻 筑摩書房 昭和38年 86頁以下参照 17) 同上書 86頁以下参照
- 18) cf. John Locke ; “An Essay Concerning Human Understanding” Book 2. Chap. 27. §16.
- 19) ibid. Book 2. Chap. 27. §19.
- 20) 『定本柳田国男集』第4巻 筑摩書房 昭和38年 89頁以下参照